

「面瀬の遺跡〜高谷遺跡を中心として〜」

気仙沼市教育委員会生涯学習課 幡野寛治氏

昨年保護者の方から

「今、高谷の遺跡を調査しているのでは是非見に来てください。」

との一報が入った。縄文の遺跡については階上地区最知遺跡が市内では有名であるが、高谷の遺跡もきつとすでに発掘調査済みと思っていた。気仙沼市史を調べると残念ながら「高谷遺跡」の名のみあつて調査の記録がない。まだ調査されていないことがわかった。震災後の住宅地造成にともない高谷遺跡の調査がはじまったようだ。教育委員会の幡野寛治氏にお願いして、今回の発掘成果を面瀬小開校三十周年の記念の冊子に掲載したいのでご協力をお願いしたところ、快く引き受けてくださり、しかも面瀬にある遺跡群の紹介

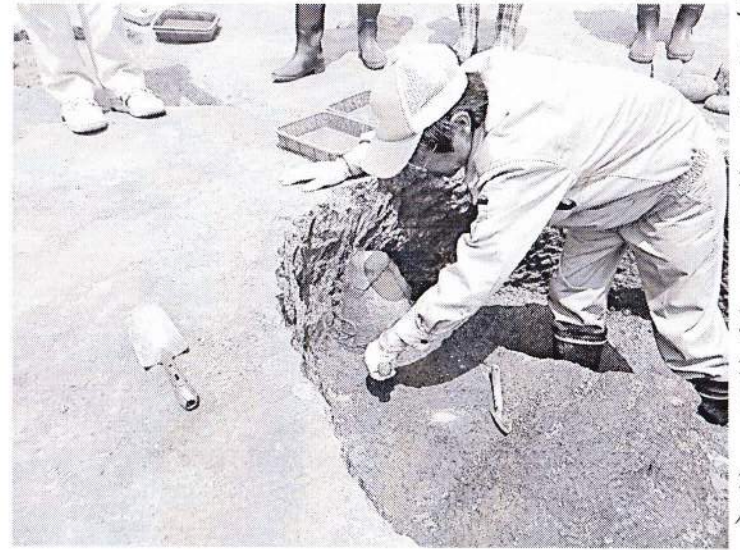
もしてくださった。以下は幡野氏からの寄稿の要旨である。

埋蔵文化財は、私たちの先祖の生活の痕跡が残されている場所であり、地域の歴史を知るうえで貴重な文化遺産です。面瀬地区にも、縄文時代から中・近世にいたるさまざまな遺跡が発見されています。ここでは代表的な遺跡について紹介します。

縄文時代は、約一万三千年前から二千三百年前まで続いたといわれています。縄文時代の遺跡で知られている高谷遺跡は、面瀬川に架かる国道四五号気仙沼バイパスの架橋から北西方向に見える丘陵に立地し、ちょうど面瀬地域ふれあいセンターの東側に位置しています。平成二十年、住宅建築工事などの先立ち、市教育委員会が発掘調査したところ、多数の縄文土器や石器などが発見されたほか、直径一〜二メートル前後ある土坑という大きな穴の跡十三基見つかりました。この土坑は「フラスコ状土坑」といい、穴の口径が狭く、底に行くにしたがって広がっており、穴の断面を見ると理科の実験で使う三角フラスコのような形に似ていることからこう呼ばれています。この

ような穴を発掘し堆積した土層を観察すると、クリ、ドングリ、クルミなど堅菓類の殻が出土する例が多いことから、貯蔵用の穴蔵として使われたと考えられますが、壊れた土器や石器なども見つかるので、穴蔵としての用途を終えると、モノ捨て穴にしたと思われます。見つかった土坑の中には、底面に小さな穴を持つものもあり、この小穴に柱を建て、放射状に覆い屋根がかけられていた可能性があります。

また、東日本大震災以降、住宅再建に伴う発掘調査が相次ぎ、さらに多数のフラスコ状土坑が見つかっており、市内では数少ない発見例となっています。



▲フラスコ状土坑を発掘調査▲

この遺跡は、出土した土器の文様やかたちなどから、今から四千年ほど前、縄文時代中期後半ごろを中心に栄えたムラの跡であることが分かりました。また、葦の目星谷幼稚園やキングスガーデンの南側の丘陵先端部に立地する、星谷遺跡からは、住宅新築工事に伴う調査で、竪穴住居跡が発見されるなど、縄文時代の集落の様子や、縄文人の生活の営みを知ることができます。時代はいつきに下って、中世、戦国時代。各地に城や館が造られ、群雄割拠の時代を迎えます。市内には約五十箇所もの城館跡があり、面瀬には相馬館跡、八幡館跡、古館跡が点在しています。八幡館跡は、岩月千岩田の沿岸にあり、標高約十メートルの丘陵に立地しています。

館跡は東西約二三〇メートル、南北約一五〇メートルの高台を中心に城が形成され、主郭（本丸）や壇状になった曲輪、堀跡などの遺構が確認できます。歴史的には、延享三（一七四九）年の「封内風土記」に「古館一ヶ所 八幡館卜申候 城主熊谷式部卜申候 右館二八幡堂有リ 三間四面ノ堂也」とあり、延宝年間（一六七三〜一六八〇）に仙台藩の城跡や館跡についてまとめ

た「仙台領古城書上」によると「一 平山 岩月館城 東西廿八間 南北廿八間 右城主熊谷式部卜申者之由ニ御座候」と記されています。城の別名を岩月城といい、『気仙沼市史 古代中世編』によると、熊谷上総直総が永享十年（一四三八）に岩手県磐井郡中里城から本吉郡月立村中館に移り、その三男直時が康正元年（一四五五）に岩月邑の八幡館を構え、天正十八（一五九〇）年、葛西氏滅亡まで六代続き、葛西氏の家臣団の一人であったことが分かっています。今も杉木立の中に八幡神社があり往時がしのがれます。

相馬館跡は、岩月台の沢にあり、東西六百メートル、南北一五〇メートルの気仙沼湾を望む高台にあります。葛西家臣、菊田掃部兵衛太郎義正の居館で、応永三年（一三九六）の二年間だけここに住み、同四年に、大島にある高谷館に移ったと伝わっています（『史料 仙台領内古城・館 第二巻』（紫桃正隆氏著）による）。また、市史には、大島領主菊田義直が、大島に移る前に一時居城した説や、戦国時代末期に東磐井郡黄海の富周館佐藤備後が来住した説など諸説あり定かではないと書かれています。現地に行くと、高台の平場（主郭）、主郭を囲む曲輪、空堀や土塁跡などが巧みに

配置された城であることが分かります。

現在、東日本大震災により、防災集団移転や道路、住宅再建など復興事業が進められています。復興事業は遺跡にかからないように市教育委員会では、事業者と調整を行います。どうしても開発しなければならない場合は、発掘調査が必要になります。市内の高台には遺跡が多く点在しているため、事業計画と遺跡との調整や調査が多くなっています。そのため、全国から埋蔵文化財専門職員が派遣され、迅速な調査を行い、復興事業が遅れないよう両立を図っています。気仙沼市には、埋蔵文化財の専門職員が少ないので、県教育委員会などを通じて、全国から派遣職員の応援をいただいて調査を実施しています。遠くは鹿児島県、佐賀県、宮崎県、岐阜県などから来ています。いまだかつてない大規模で多くの発掘調査が市内で進められており、土器や石器など出土品も膨大な量となっていて、その整理作業や調査報告書の作成など、現場調査以外にも地道な作業がまだまだ続きます。

最近、唐桑大沢地区の防災集団移転事業に伴う波怒棄館遺跡の調査で、縄文時代前期後葉（約五五〇〇年前）の貝塚から大量にマグロの骨が見つかり

ました。骨と一緒に粘板岩を刃物状に加工した石器や、その破片が刺さったままの背骨や、数十センチごとに切断した痕跡があるものもあり、骨の大きさから体長二メートルを超すクロマガロとみられ、釣針など漁具も出土するなど、盛んに漁に挑む縄文人の姿が想像できます。このように復興調査により貴重な成果が得られた遺跡もあります。新たな歴史が明らかなるばかりではなく、これも復興の証のひとつでもあると思います。遺跡を掘り、歴史を伝えること、次の世代に伝えていくことこそ大事なことでして受け止めたい。

※併せて「面瀬地区古跡配置図」もいただきました。



▲フラスコ状土坑からの出土の縄文土器▲

以上の寄稿文を見るといくつかの面瀬にまつわることがわかる。まず併せていただいた面瀬地区古跡配置図から現在発見されている面瀬地区内に限らず縄文遺跡は大体現在海拔で十メートル以上の内陸に配置されていることだ。つまり今から一万九千年前から始まった「縄文海進じょうもんかいしん」により、高谷遺跡が繁栄した頃は大体今より十メートルくらいの内陸に海岸線があったと思われる。つまり高谷遺跡、星谷遺跡等は海岸線にそってあったと思われる。当然、自然の気候変動によるものであるから四千年前の高谷遺跡はその海拔のところに縄文人は生活したのだが、寺沢遺跡、長平遺跡、星谷遺跡はもっと古い遺跡で標高二十メートル程度に海岸線があったと思われる。ただし、そこに定住した縄文人があくまでも漁労物を主食料源とした場合である。それを裏付けるように縄文海進のピークは今から約六千年前とあるので符合する。総合すると高谷遺跡の繁栄した四千年前の面瀬地区は高谷地区、岩月丘陵の下、赤田橋上流域までが海岸線であったことが分かる。小山正平氏（元階上小学校長）によると現・面瀬川沿いの猫淵あたりまでが海岸線だったという。また、高谷遺跡にフラスコ状土坑が多数発見された

ことは実に興味深い。各地のフラスコ状はその形状からはじめの目的は食物の貯蔵であった。地下は常低温が可能であるから地上の気温変化をなるべく避けるために口は狭く、多くを常温保存するために中奥は広く掘ったためにフラスコ型になったものらしい。そして使用後は廃棄物の捨て場となったという。このことは後世の我々に当時の生活を知らせてくれるタイムマシンとなったが、そのことばかりでなく縄文人が廃棄物をそちこちに散らかすのでなく一カ所にあつめて捨てるという習慣があつたことがわかる。廃棄物を集積して捨てるというのは人類の習癖なのであろうか。諸動物には見られないことである。そしてなぜ高谷遺跡に多いのかは、少ない資料から見れば四千年前の食料の中心がクリ、ドングリ、クルミだったとも言える。他の六千年前の遺跡にフラスコ土坑があまりみられないのは、逆に主食料の違いをうかがわせる。

さらに、岩月館城については、本編「面瀬さがし・五・サイカチの木」とある程度符合している。ただし、石巻から落ちのびた葛西の残党がもともと定住していた熊谷氏を名乗って、伊達から名を隠したというのが、そのもとも

と定住していた熊谷氏も幡野氏の調査では葛西一族とすることだから、まだまだ研究の余地がある。また五で掲載した「千田大学の墓碑」らしいという墓石には数度の調査の結果、墓碑文が複数名であるらしいとわかった。参考に記しておく。なお、解説には面瀬小学校研究主任・書道師範、岩槻仁先生のお力を得た。※墓石はいずれも丸みをおびた墓石



墓石正面



墓石右側面



